被災地を結ぶ、伝える活動

伝承ロード 縁 えにし

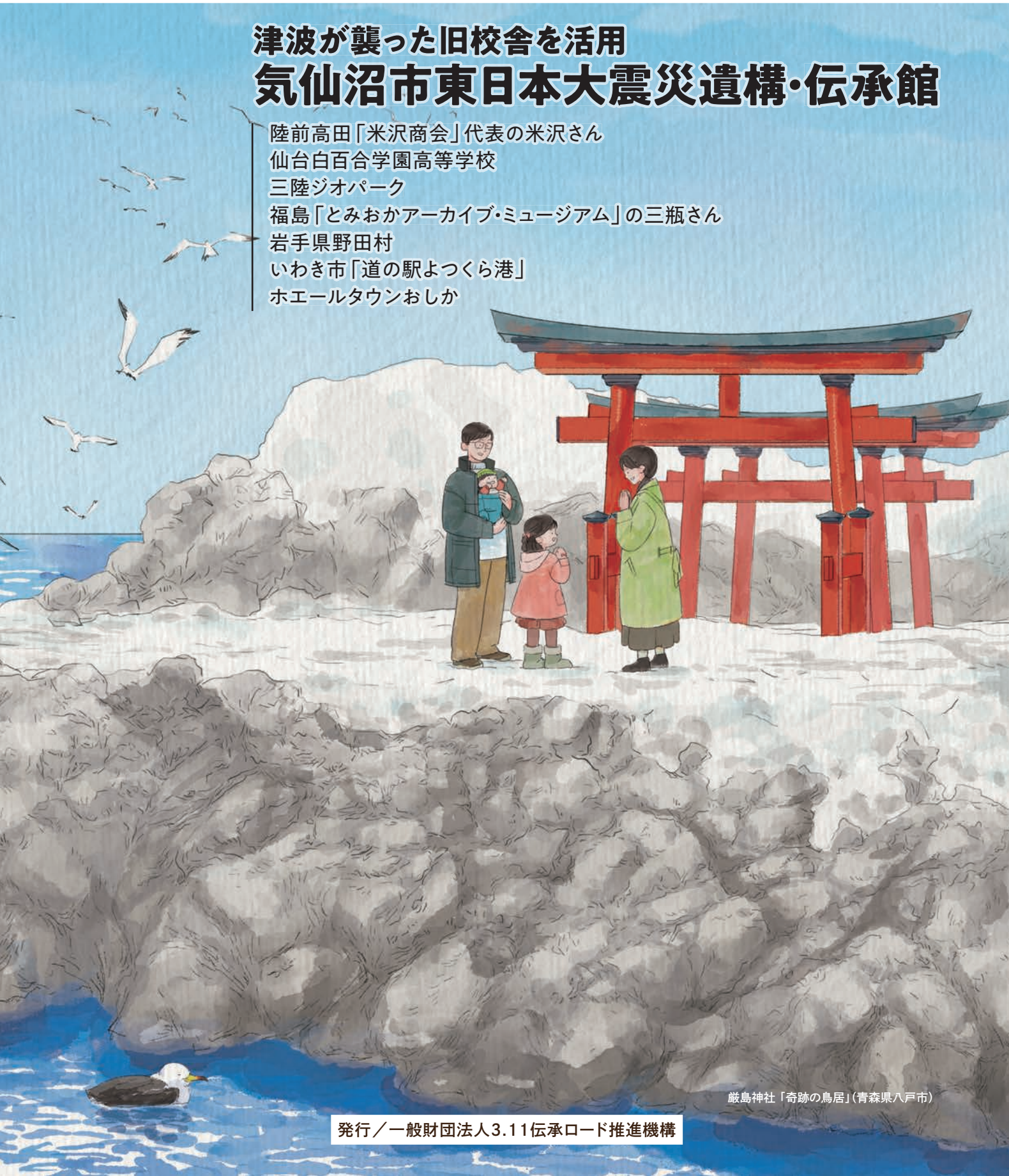
教訓が、いのちを救う。

3.11 DENSHO ROAD

2022 vol.5

津波が襲った旧校舎を活用
気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館

陸前高田「米沢商会」代表の米沢さん
仙台白百合学園高等学校
三陸ジオパーク
福島「とみおかアーカイブ・ミュージアム」の三瓶さん
岩手県野田村
いわき市「道の駅よつくら港」
ホエールタウンおしか



巌島神社「奇跡の鳥居」(青森県八戸市)

発行／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構



津波が襲った旧校舎を活用

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館

気仙沼市の名勝、岩井崎の近くにある気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館

「震災の記憶と教訓を伝える〝目に見える証〟として」をコンセプトにした気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館は、巨大津波が襲った気仙沼向洋高校の旧校舎を震災の遺構・伝承の場として活用した施設です。語り部活動に力を入れ、学校教育活動や一般向けの防災セミナーなど体験プログラムも充実。平日も全国各地から多くの人が足を運んでいます。

三陸ジオパークの南端エリア、岩井崎の近くにある気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館は2019年3月に開館しました。

気仙沼市では震災による津波とその後の大規模火災で死者（震災関連死を含む）1143人、行方不明者212人に上る被害を受けました。「このような悲劇は2度と繰り返してはいけない」。同館は将来にわたり震災の記憶と教訓を伝え、警鐘を鳴らし続ける「目に見える証」として活用し、「津波死ゼロのまちづくり」を目指しています。

見学は迫力のある300インチ大型スクリーンでの記録映像と、写真パネルで震災時や直後の様子を理解した後、震災遺構の旧南校舎に進みます。渡り廊下を抜けて旧南校舎に入った途端、震災があった11年前にタイムスリップした感じに。津波で破壊され、がれきや漂着物が残ったままの教室がずらりと並びます。

特に目を引くのが3階の教室に流れ着いた自動車で、ほとんど原形をとどめていません。この付近は高さ13メートルの津波が押し寄せ、4階の床上まで浸水しました。4階教室の床上に置いてあるレターケースの下部は浸水でさびており、旧南校舎の「津波到達地点」とされています。この校舎は各教室のベランダの壁や最上階の4階壁面にもえぐれた痕があり、外観からも巨大地震や津波のすさまじい威力を感じさせます。

学びの場の機能も

同館は語り部活動に力を入れています。住民有志の他に、中高生も含め約100人が語り部として在籍。震災の月命日に近い土・日曜、祝日に中高生が館内をガイドしています。若者への震災伝承、防災教育の大切さは被災地共通で、研修や修学旅行など学校教育の一環で多くの小中高生が訪れています。企業・団体など社会人の研修でも利用されており、施設見学をベースにワークショップなど学び場としても機能しています。

入館料は一般600円、高校生400円、小中学生300円。開館は午前9時半～午後5時（入館は午後4時まで）、10～3月は閉館が午後4時（入館は午後3時まで）に早まります。休館は月曜（祝日の場合は開館し翌日休館）と12月30日～1月4日ですが、震災の月命日に当たる毎月11日、「防災の日」の9月1日、「世界津波の日」の11月5日は曜日にかかわらず開館します。



所在地／気仙沼市波路上瀬向9-1
TEL0226-28-9671

知恵や知識 磨き上げよう

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館長の芳賀さん

「自然災害は時に人知を超える。巻き込まれないようにするにも知恵や知識を磨き上げていこう」と語るのは気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館長の芳賀一郎さん(73)。生まれも育ちも同館がある気仙沼市波路上地区。高校の体育教員として長年、宮城県北の高校に勤務。気仙沼向洋高校には定年退職までの17年間勤め、その後も非常勤講師として教員を続けました。



教員として長年勤めた学校が震災遺構として残った。今は館長として活動する芳賀さん

震災当日は午前中の勤務を終え、学校近くの自宅の庭にいた時、強い揺れが襲ってきました。「立っていられない、尋常ではない揺れ。直感的に巨大津波が来ると思った」。明治三陸地震津波で5人の祖先を亡くし、芳賀さんの祖父が海からさらに離れた海抜約15㍍の場所に家を移し、今は芳賀さん一家が住んでいます。「祖父は『この場所なら絶対に津波は来ない』と言っていた」。

実際は、自宅自体は大きな被害はなかったそうですが、庭には津波で押し寄せた木材など無数の漂着物に覆われました。

当時自宅にいた芳賀さんの家族や付近住民は、芳賀さん方からさらに5㍍高い場所にある国道45号のバス停留所に集まり、難を逃れました。「満潮時の大津波だったら、もっとひどいことになっていたかもしれない」と振り返ります。

階上中学校に設置された避難所の運営に震災2日後から携わり、翌年から5年間、階上公民館長を務め、今年4月に同館の第3代館長に就任しました。

沖縄からの来館者

「震災時、向洋高校には生徒や教員ら約250人がいました。海から約150㍍、海抜は1㍍の場所で13㍍の大津波に襲われながらも臨機応変な迅速避難で一人も犠牲者を出さなかったのは奇跡。被害の実像だけでなく、こうした事実も伝え、自然災害から助かるにはどうするべきかを問いかけていきたい」



旧南校舎3階の「津波で流されてきた車」

開館から3年半余りが経過しました。震災遺構として津波が襲った旧校舎の活用だけでなく、映像や語り部による詳細な説明や体験交流ホールを活用した学習プログラムを提供するなど、防災教育の面でも高い評価を受け、全国から来館者が増えています。

「インターネットで当館のことを調べ、沖縄から来た子ども連れの家族もいました。子どもに津波被害を教えるのに良い場所だったと喜んでもらいました」。芳賀さんは来館者に気さくに声をかけ、時にガイドも務めます。

国内では南海トラフや千島海溝を震源とする巨大地震と津波の発生が懸念されています。芳賀さんは「人は実際に体験した以上の災害を想定するのが難しい」と指摘します。

また、施設を見学して災害の怖さや避難の重要性を理解しても、いざ直面した時、根拠もないのに「自分は大丈夫」と思い込む正常性バイアスが働くことも危惧しています。

「チリ地震津波の経験者が震災時どのように状況を捉え、行動したのだろうか」と芳賀さん。「近海を震源とする激震に見舞われた後の津波です。チリ地震津波どころではなかった」と経験のみにとらわれず、現状を的確に判断する大切さを強調。

「津波には同じ〝顔〟はない。時間、天候、干満潮などで、いくつも違った表情を持っています」と訴えています。



旧北校舎と総合実習棟を結ぶ渡り廊下があった場所に積み重なった車やがれき

津波体験 小学生に語る

陸前高田「米沢商会」代表の米沢さん

陸前高田市で雑貨や包装資材などを販売する米沢商会の代表、米沢祐一さんは、東日本大震災の時に3階建ての自社ビルで津波に襲われ、屋上最上部の煙突に上がり、九死に一生を得ました。米沢さんは現在、仕事の傍ら語り部としても活動。思い出が詰まったビルを自力で震災遺構として残し、日頃から災害を意識する大切さを訴えています。



被災したビル1階で震災当時の様子を語る米沢さん



米沢祐一さん

米沢さんは助かりましたが、一緒に家業を切り盛りしていた父母と弟を津波で亡くしました。震災後に誕生した商店街に店を再建し、2020年4月から営業しています。この地区は約10㍍かさ上げした土地で、津波に襲われたビルと現店舗の間は直線で約500㍍。震災の前と後では市街地の様子が一変しました。

広大な空き地にぽつんと残るビルに、一関市立金沢小学校の4年生13人と引率の教員2人が訪問。米沢さんはビル内部を案内し、震災当日から翌日救助されるまでの自身の行動を説明しました。

あの日、ビル近くの倉庫にいて、長く激しい揺れで棚が次々と倒れる様子を目の当たりにした米沢さんは、ビル内の店舗も同様と思い、急いで戻り父母や弟と会います。幸い、けが人はなく、従業員を帰宅させて、残ったのは米沢さん家族4人。父母は「ある程度片付いたら市民会館に行く」と言い、再び倉庫に戻る米沢さんと永遠の別れとなってしまいました。

「ビルに戻る途中に会った住民も、家族も、自分自身も、誰も津波という言葉を口にしなかった」と米沢さん。「避難所に指定されていた市民会館で3人を亡くした。災害の時、その避難所が本当に安全かどうか考えてほしい」と呼びかけ、児童たちは大きくうなずきました。

災害を予想しよう

米沢さんは倉庫にいて聞こえてきた防災無線の放送で津波の襲来を知りました。「それまでも防災無線は流れていたのだろうが、全く聞く耳を持っていなかった」。途中で切れた防災無線に心がざわつき、また戻ったビルで誰もいないことを確認しましたが、この時も「ここまで来ないだろう」と思ったそうです。

2階に上がった時に窓から見えた真っ黒な水とがれきで津波に気付き、必死に屋上に出ると津波で周囲の屋根は全く見えません。屋上最上部の煙突につながる階段を登っている時、屋上も津波が越えてきて、煙突の上にしがみつきました。

地面から煙突まで高さは約15㍍。「市民会館の屋根は見えず、全滅したと思った」。静かに聴いていた児童たちの表情が曇りました。なんとか難を逃れましたが、ビルの外に脱出できず、屋上で一夜を明かし、ビニール袋を見つけて体にまとったものの低体温症に。翌日の夕方、ようやくヘリで救出されました。

米沢さんは「災害が起こりそうな時、起こりそうな場所にいる時は、どんな被害が予想されるのか、身を守るにはどうしたらいいかを考えて」と強調しました。児童からは「おなかは空かなかった?」といった質問や、「1人で寒い時にビニール袋を見つけて覆ったりできることが、すごいと思った」などの感想があり、米沢さんは笑顔で応えていました。



ビル最上部の煙突までの高さ約15㍍の米沢商会ビル。津波が煙突のてっぺん近くまで押し寄せた

少数者に寄り添い課題探究

仙台白百合学園高等学校



仙台防災未来フォーラムで「非常時におけるマイノリティを表すピクトグラムの有用性について」発表したLSコース3班（左から森凛々子さん、尾崎和花さん、千葉容子さん）。デザイン案は主に松浦ももかさんが手掛けた

東日本大震災の犠牲者を追悼し、記憶を後世に伝え、復興を誓う「鎮魂の日祈りの集い」を毎年3月11日に開くなど、防災や伝承の活動に取り組む仙台白百合学園高等学校（藤田正紀校長）。仙台防災未来フォーラムにも積極的に参加し、2022年3月にはLSコースの生徒4人が「非常時におけるマイノリティを表すピクトグラムの有用性」をテーマに、ブース展示を行いました。

キリスト教の精神に基づく「グローバルサーバント（世界のための奉仕者）リーダー」の育成を目指すLSコースは、課題解決型の授業が特徴。2015年から5年間、文部科学省の「スーパーグローバルハイスクール」の指定を受けた経験を土台に、思考力や判断力、表現力を育むカリキュラムを設置しています。20年には「災害時における外国人への支援体制」をテーマにした探究活動で「仙台市防災功労表彰」を受賞しました。



仙台防災未来フォーラムや学園祭などで発表を重ね、生徒たちが完成させた性自認や性的指向を限定せずに使えるピクトグラム

トイレの問題に着目

22年3月に仙台防災未来フォーラムに参加したのは、同コースで「差別」をテーマに課題研究に取り組む現2年生の4人。男女で分けられた従来型のトイレを使用しづらい性的少数者の悩みに着目し、性別を限定しないピクトグラムを提案しました。

性的少数の当事者や、デザインに詳しい仙台高等技術専門校の関係者に相談しながら試作と改良を重ね「安全状態」の意味を持つ緑色の人型に「ALL」の文字を組み合わせたデザインを考案、活用例を模索しています。

生徒たちは「課題探究を通し、たくさんの人と関わることができて世界が広がった」と語り、フォーラムを見学し「『防災専用』で想定するのではなく、非常時に日常で使っているものを生かすことの大切さも学ぶことができた」と手応えを感じています。

2年生クラス内では高齢者や外国人労働者といった人たちを災害時にいかに守るかをテーマとした課題探究も行っています。今年「東松島研修」も実施。震災直後に支援物資が届かなかった経験から造られた備蓄倉庫や、エコタウンなどを見学しました。

同校は22年度入学生以降、コース制を類型制へと改編し、課題解決型授業をさらに充実させたカリキュラムとなっています。

自然と人との共生 体感しよう

三陸ジオパーク

南北に長く連なる三陸海岸は地域ごとに独特の景観をつくり、その美しさが多くの観光客を魅了しています。地質的にも特徴が多く、日本ジオパークの一つ「三陸ジオパーク」に認定されています。海岸の地質や形状は、これまで何度も襲った大地震や津波も大きく影響しています。自然の恵みや厳しさと人との共生を体感しに足を運んでみませんか。



峻厳な景観が広がる北三陸の名所の一つ、田野畑村の「鵜の巣断崖」

サイトが点在 地域の魅力に迫る

ジオパークとは「地球・大地（ジオ・Ｇｅｏ）」と「公園（パーク・Ｐａｒｋ）」を組み合わせた言葉。「大地の公園」を意味し、地球（ジオ）を学び、丸ごと楽しめる場所です。大地（ジオ）の上に広がる動植物や生態系（エコ）の中で、私たち人（ヒト）は生活し、文化や産業などを築き、歴史を育んでいます。ジオパークでは、これらの「ジオ」「エコ」「ヒト」の三つの要素のつながりを楽しく学べます。

まずは、そのジオパークの見どころとなる場所を「サイト」に指定。多くの人が地域の魅力を知り、利用できるよう保護を行います。その上で、サイトを教育やツアーなどの観光活動に生かし、地域を元気にする活動や住民に地域の素晴らしさを知ってもらう活動を展開しています。

日本ジオパーク委員会認定の「日本ジオパーク」は現在46地域。このうち9カ所が国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）認定の世界ジオパークになっています。



三陸ジオパーク推進協議会お話を伺った方
左から阿部智子さんと澁澤岳史さん

地域ごとに独特の景観 出自異なる北と南の地形

海岸線300キロに及ぶ広大なジオパーク

三陸ジオパークは2013年9月に日本ジオパークとして認定されました。エリアは八戸市から気仙沼市までの南北約220キロ、東西約80キロで、その海岸線は約300キロにも及ぶ日本一広大なジオパークです。

三陸は太平洋プレートが沈み込む日本海溝に面し、5億年に及ぶ大地の歴史を今日まで連続的に残している貴重な地域です。

日本列島は1500万年前ごろに大陸から分かれたとされますが、それよりはるか昔に南半球からやって来た大地が三陸南部を、現在のハワイ付近の海底にたまったものが大陸の縁に押し寄せられて固まり、陸地となったものが三陸北部を形成。両者はそれぞれ移動してきて出合ったと考えられています。

三陸ジオパーク推進協議会ジオパーク推進員の阿部智子さん（56）は「三陸の北は雄大な断崖絶壁の海成段丘、南は複雑な海岸線のリアス海岸がメインになっており、地形が異なります」と話します。



釜石市の箱崎半島にある「千畳敷」も絶景スポットとして知られる

五つの魅力打ち出す 震災伝承の役割も

こうした特徴や成り立ちを背景に、三陸ジオパークは「①5億年の多様な大地」「②リア

スの恵みとテラスの営み」「③オンリーワンの生態系」「④豊かな地下資源」「⑤大津波の歴史と共生」の五つの魅力を打ち出しています。

先述した三陸の起源や地形変動にちなんだものが①と②。③は特異な地質などの環境による「ハヤチネウスユキソウ」などの固有種や、「やませ」と呼ばれる夏に吹く冷たい北東風と海霧など厳しい気象条件に耐えながらも咲く「シロバナシャクナゲ」の群落など、多様な生態系の中でオンリーワンを見ることができます。

④は久慈琥珀、平泉の黄金文化を支えた気仙金山、日本の近代製鉄の礎となった釜石鉱山など、三陸の文化や産業を支えてきた豊かな資源群の歴史に触れられます。

⑤は東日本大震災の津波による惨禍を語り継ぎ、自然災害に対する危機意識や防災意識を醸成する「震災遺構」を数多く有する三陸ジオパークの特徴を生かしています。三陸沖は太平洋プレートの沈み込みに伴う大地震や津波災害の多発地帯であり、太古の地層にも大津波の爪痕が残されています。

このような歴史を踏まえ、三陸ジオパークでは「悠久の大地と海と共に生きる～震災の記憶を後世に伝え学ぶ地域へ～」をテーマに、震災遺構を通じた伝承の場としての役割も担っています。

三陸ジオパーク推進協議会事務局員の澁澤岳史さん(33)は「津波で海岸沿いや海中を移動した巨石を『津波石』と言います。三陸では東日本大震災によるものを含め、多くの津波石があり、津波の威力を知ることができます」と語ります。



テーマはさまざま
三陸ジオ認定ガイドによるツアー



ガイドの説明を熱心に聴き入るツアー参加者

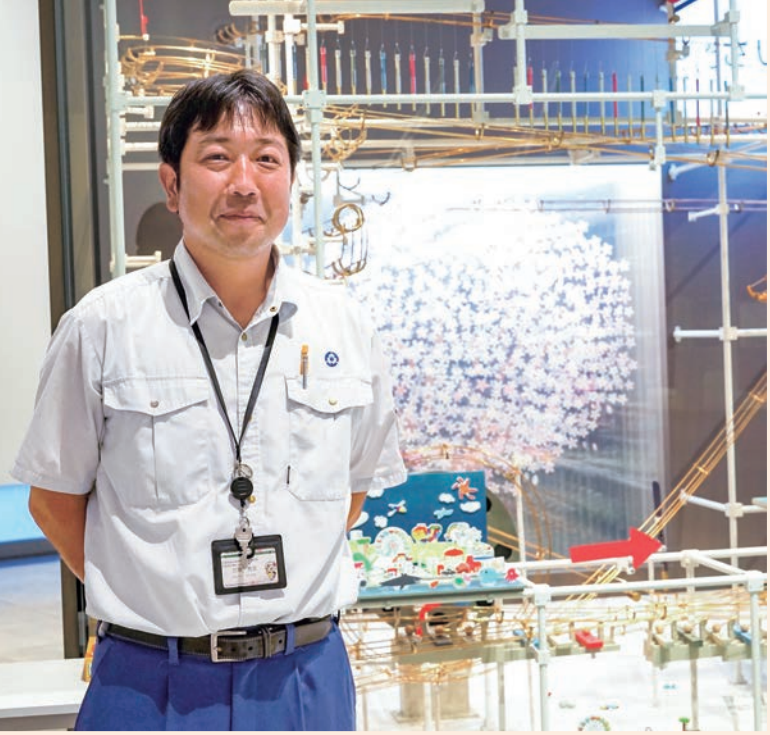
三陸ジオパーク内の各地では、三陸ジオパーク認定ガイドによるツアーが企画されています。ツアーのテーマはさまざまで、中には震災の語り部と被災地視察を兼ねたものもあります。協議会では「震災伝承施設や遺構の見学とともに、ぜひ三陸の豊かな自然に触れ合うジオパークの旅を楽しんでください」とPRしています。

三陸ジオパーク推進協議会 事務局
所在地／宮古市五月町1-20 宮古地区合同庁舎2階
TEL0193(64)1230
https://sanriku-geo.com

複合災害の現実伝える

福島「とみおかアーカイブ・ミュージアム」の三瓶さん

東京電力福島第一原子力発電所事故の影響で一時全町避難を余儀なくされた富岡町。当時、町職員の男性は全国各地に分散した町民の支援に奔走する傍ら、町に残された震災以前の資料や震災遺産の収集に尽力。それらは昨年開館したミュージアムに展示されています。希望者には解説も行っており、自身の体験を交えながら複合災害の現実を伝えています。



地元の小学生が描いた夢の街を模型化した「ボールタウンキューブ」の前に立つ三瓶さん

昨年7月に開館した「とみおかアーカイブ・ミュージアム」副館長の三瓶（さんぺい）秀文さん（43）は地元出身。富岡町教育委員会の職員で、町歴史民俗資料館の学芸員をしていた時、震災に遭いました。

「その日の夕方、災害対策本部が設置され、『原発が危ない』ということで3月12日未明には全町避難が決まりました。そこからが目まぐるしい日々の始まりでした」

三瓶さんは避難所となった川内村までバスで町民を輸送。普段30分ほどで着く距離が渋滞で3時間余りかかったといいます。

さらに翌週には郡山市の「ビッグパレットふくしま」へ移り、一部の町民は町が友好都市協定を結んでいた埼玉県杉戸町へと避難しました。

「誰もが『すぐ家へ帰れるだろう』と思っていましたが、2011年4月22日に町全域が警戒区域に指定され、立ち入りができなくなりました。突然故郷を奪われた悲しみは計り知れません」

次世代に伝えていく

とみおかアーカイブ・ミュージアムには、津波で殉職した警察官が乗っていたパトカーや、避難先のホテルで子どもがメモ用紙に書いた日記など複合災害の現実を生々しく伝える資料を展示しています。

小中高校の見学受け入れや、警察庁の新人職員を案内することもある三瓶さんは「復興が進み、震災の記憶も薄らいでいく中、次世代に富岡で起きた過酷な現実を伝えていく使命を感じます」と力を込めます。

17年には一部地域を除いて避難指示が解除され、富岡町での役場業務が再開しました。町内に居住する住民は約2000人。今も1万人余りが町を離れて暮らします。

三瓶さんらは14年6月、「富岡町歴史・文化等保存プロジェクトチーム」を立ち上げ、民家に残された震災前の日常を捉えた写真、地域の記録など多くの資料を収集してきました。館内にはそれらが展示され、複合災害を経て町がどう変わっていったか知ることができます。

「以前はここで平和な日常が普通に営まれていました。『自分が今住んでいる場所で同じことが起きたら』。そう考えることで明日への向き合い方が変わるかもしれません」と三瓶さんは思いを込めます。



町の特徴や成り立ちを伝える地域資料と震災遺産を展示する常設展示室



所在地／富岡町大字本岡字王塚760-1
TEL0240-25-8644

小さな自治体の利点生かす

復旧・復興 住民のつながり大切に 岩手県野田村



城内地区高台団地は2015年4月に「新町」という行政区になった。新たな気持ちで未来へ向かおうという希望が込められている

雄大な断崖絶壁が特徴の北三陸では珍しく、広い砂浜に恵まれた岩手県野田村はその昔、海運物流の拠点を担っていました。船荷は内陸に運ばれ、村も海から陸地へと拓けてきました。海と共存してきた村を襲った津波。小田祐士村長(66)は「住民の協力があったからこその復興だった」と振り返ります。



お話を伺った方
小田祐士村長

震災前月末時点で人口4831人、1674世帯だった野田村に最大18メートルの津波が襲来、最大遡上到達高は37・8メートルに及びました。死者は37人(うち村民28人)で、村内の約3分の1に当たる515棟の住家が被害を受けました。防潮堤が決壊して村の中心部を津波が襲い、かなりの範囲で被災しました。

村内の避難者はピーク時で900人余り。公民館や寺院、国民宿舎、高校の合宿所などに身を寄せたそうです。「避難所によりライフラインに差があり、困難な生活を強いられた人もいて反省点である。どこの避難所でもできるだけ生活水準が同様となるようにするのが課題」と小田村長。

震災直後、頼りになったのが被災しなかった村民たち。公民館に布団を提供するなど協力してくれました。もともと顔見知りの住民が多く、コンパクトな自治体ということが復旧・復興の中で迅速な対応につながったようです。

当初は行方不明者の発見が急務。災害対策本部前に避難者、死亡者、生存確認者の氏名を大きな紙に書き出すと、おのずと行方不明者が浮かび上がり、「その人とはさっき会った」などの情報があれば生存確認者になる仕組み。早く行方不明者を見つけないと次に進められないため、建物を取り壊さざるを得ない地域の1軒ずつ意向を確認し、許可を得てから4~7日で解体するなどして、3月中に村内の全ての行方不明者が見つかりました。



重機でがれきを除去しながらの捜索活動(2011年3月17日)

迅速に復興方針示す

村では復興へと徐々にシフトチェンジしていきます。「村の復興方針が決まらないと、われわれの今後も決められない」という住民の思いを受け、復興計画策定に先立ち5月に初の住民懇談会を開きました。

三つの堤防で村の中心部を守るとともに、最も内陸側の第3堤防から海側は危険区域として非居住エリアにして住宅の高台移転などを進めることに。城内、米田、南浜の3地区の各高台団地に自力再建住宅と災害公営住宅が混在する計98戸分の整備に着手。城内地区が最も大きく、敷地面積約6ヘクタール、74区画(自力再建20、災害公営54)です。

岩手県内で最も早い防災集団移転事業として2013年1月に着工、16年4月には最後に残った城内地区の災害公営住宅への入居が始まり、新しい生活がスタートしました。

新しいまちづくりが進んでも、何より重要なのは災害に対する住民の意識。いつまた津波が襲ってくるのか分かりません。「逃げるという意識をどう持続させるかが重要」と小田村長。「大きな地震が来たら津波の有無にかかわらず高台に逃げる。こうした姿勢を日頃から培うことが大切だし、震災伝承にもつながる」と語ります。

震災後に生まれたさまざまな交流も、それぞれの単発ではなく、もっと複合的で永続的なものに進化させることで、地域活性化にもつなげたい考えです。

震災翌月に営業再開 リニューアル10周年

いわき市「道の駅よつくら港」



福島県内19番目の道の駅。周囲にヤシの木が並び、南国の雰囲気が漂う

いわき市の国道6号沿いにある「道の駅よつくら港」はオープンから約8カ月後に東日本大震災の津波で甚大な被害を受けました。再開には時間がかかると思われましたが、ボランティアの協力でがれきを撤去し、翌月には屋外での仮営業を開始。2012年にリニューアルオープンが実現し今年で10周年を迎えました。

四倉海水浴場の近くにある「道の駅よつくら港」は、周囲にヤシの木が立ち、南国の雰囲気を感じられます。2009年に地元産品を扱う交流館が、10年7月に情報館が完成しグランドオープンしましたが、翌年の震災で被災し1年をたたずに全壊しました。

早期復旧は困難と思われましたが、多くのボランティアの協力でがれきを片付け、翌月には屋外での仮営業を開始。炊き出しや販売イベントなどを行い、いわきの復興拠点としての役割を担いました。

「道の駅の無残な姿を目の当たりにした時は絶望しましたが、地元生産者の皆さんや県内の道の駅などからの励ましとサポートを受け再開することができました」と白土健二駅長(59)は感謝します。

新交流館の1階直売所では、いわき市の魚に選定されているメヒカリの丸干しや、郷土料理「サンマのポーポー焼き」といった水産加工品に加え、温暖な気候を生かして栽培された野菜や果物を、リーズナブルな価格で販売しています。

交流館2階のフードコートからは広い砂浜と太平洋を望みつつ食事を楽しめ人気を集めています。いわき市内各地の情報を手に入れたいときは休憩スペースを備えた併設の「情報館」へ。大型モニターやパンフレットを設置し、地元の魅力を発信しています。

四倉復興の象徴に

水や電気も使えない中、震災翌月から週末限定で始めた仮営業。商品の不足は、以前から地域間交流でつながりがあった、県内の道の駅や地域の生産者らの協力で乗り切ることができました。当初は双葉郡内から避難してきた人や自衛隊・消防隊などが訪れ、救援拠点としても大きな役割を担っていましたが、「以前のように気軽に立ち寄れる道の駅を復活させることが、地元の皆さんの元気につながる」との思いで復旧を急いだと言います。

白土駅長は「『道の駅を四倉復興のシンボルに』との思いで駆け抜けてきました。今後も地域の人とのつながりを大切にいわきの活性化に貢献していければ」と笑顔で話します。

連絡先0246(32)8075。


水産加工品や農産物、総菜などさまざまな商品が並ぶ

※第3分類(訪問しやすく、案内員の配置や語り部活動など、来訪者の理解しやすさに配慮している施設)のみ掲載

- **アクアマリンふくしま** いわき市小名浜字辰巳町50
- **いわき市ライブいわきミュウじあむ「3.11いわきの東日本大震災展」** いわき市小名浜字辰巳町43-1
- **いわき市地域防災交流センター 久之浜・大久ふれあい館** いわき市久之浜町久之浜字中町32
- **いわき震災伝承みらい館** いわき市薄磯3-11



所在地／いわき市四倉町5-218-1
TEL0246-32-8075

捕鯨の町の観光・交流拠点

ホエールタウンおしか

石巻市の市街地から車で約1時間、牡鹿半島の鮎川にある「ホエールタウンおしか」は東日本大震災後に誕生した観光拠点。「観光物産交流施設Cottu（こっつ）」「牡鹿半島ビジターセンター」に加え、津波で全壊して再建された「おしかホエールランド」の3施設が集まり、観光客や住民の憩いの場になっています。



おしかホエールランドの展示の目玉の一つ、マッコウクジラの骨格標本を紹介する雫石さん

海抜6㍍の防潮堤の上に立つホエールタウンおしかは、おしかホエールランドの移転再建に合わせ2020年7月にグランドオープン。先行して19年10月に観光物産交流施設Cottu、牡鹿半島ビジターセンターが開設されました。施設の運営・管理は石巻市の委託を受け、鮎川まちづくり協会が行っています。

鮎川は捕鯨の町として栄えた歴史があり、震災前、おしかホエールランドでは捕鯨やクジラに関する資料を展示していました。津波で多くの資料が流失しましたが、文化庁を中心とした「文化財レスキュー事業」によって資料の一部が救出されました。全長16・9㍍のマッコウクジラの骨格標本もその一つ。1986年に、当時鮎川に本拠を置いていた捕鯨船と岩手県の捕鯨船との共同操業によって、小笠原諸島の父島沖合いで捕獲された雄のクジラです。



牡鹿半島ビジターセンター。鮎川の文化や産業を紹介する展示に、最近はシカの剥製が加わった。カフェもある



観光物産交流施設Cottuにはインフォメーション、乗船券売り場、飲食店3店、土産店2店が入る

なじみの施設や店が集合

鮎川まちづくり協会職員の雫石彪真（ひゅうま）さん(27)は鮎川で生まれ育ち、震災当時は高校1年生。「おしかホエールランドをはじめ、被災して震災後は仮設商店街『おしかのれん街』で営業していたすし店や工芸店など、地元でなじみの施設や店が集まっています」と案内します。

Cottuには金華山や網地島、田代島など離島への乗船券売り場も入り、住民や観光客が訪れます。インフォメーションでは観光案内の他、レンタサイクルも受け付けています。起伏のある地域ですが電動アシスト付きの自転車で、潮風を浴びながら快適にサイクリングが楽しめます。雫石さんが提案するのは、おしか御番所公園までの近距離ルート。

「ホエールタウンおしかから3㌔弱。高台にあり眺望抜群。震災前から変わらない美しい海や金華山が見えます」

復旧・復興工事が一段落し、周辺の景観は変わりましたが、屋外にある捕鯨船「第16利丸（としまる）」は当時と同じ場所で存在感を放っています。大津波に襲われたものの形をとどめ、復興のシンボルになっています。



復興のシンボルの捕鯨船「第16利丸」は甲板に上がることもできる。見学自由



所在地／石巻市鮎川浜南43-1
TEL0225-24-6644

＼＼ 石巻市・いわき市の震災伝承施設 ／／

- A **石巻ニューゼ**　石巻市中央2-8-2 A棟1B
- B **伝承交流施設 MEET門脇**　石巻市門脇町5-1-1
- B **東日本大震災メモリアル南浜つなぐ館**　石巻市南浜町3-1-24
- B **石巻市南浜津波復興祈念公園**　石巻市南浜町1丁目地内外
- B **石巻市震災遺構大川小学校**　石巻市釜谷字韮島94
- B **東日本大震災慰霊碑（日和幼稚園被災園児慰霊碑）** 石巻市門脇町5-242
- B **石巻市震災遺構門脇小学校**　石巻市門脇町4-3-15
- B **がんばろう!石巻看板**　石巻市南浜3地内（石巻南浜津波復興祈念公園内）

Topics & Information

東松島伝承ロードバス事業 仙台駅発着 日帰りバスツアー

「震災伝承と復興による魅力の創出」

かつて野蒜（のびる）海岸の海水浴客、奥松島観光でにぎわった東松島市野蒜地区は、東日本大震災によって甚大な津波被害を受けました。日帰りバスツアーでは復興でよみがえった街の新たな魅力と知られていない震災のお話を紹介します。

仙台駅発着 日帰りバスツアーの行程

時　間	行　程
9:20	JR仙台駅東口 出発
移動	
10:00～10:40	語り部による座学：「野蒜ケ丘団地の造成」（野蒜市民センター）【復興】
10:40～11:00	野蒜ケ丘団地をバス車窓から見学【復興】
移動	
11:05～11:45	野蒜地区の震災記憶を訪ねて【復興】 ○JR仙石線の移設痕跡 ○手作り避難所「お佐藤山」 ○津波を免れた列車の記念碑 ○残されたベルトコンベアのボックス バスで移動しながら見学
移動	
11:50～12:50	【昼食】KIBOTCHA（キボッチャ）「森のキッチン」
移動	
12:55～13:50	東松島市震災復興祈念伝承館 震災遺構野蒜駅プラットホームを見学【伝承】
移動	
14:00～15:10	奥松島自由見学【観光】 （あおみな：奥松島観光拠点でお買い物ができます） （カキ小屋で奥松島のカキを堪能できます） （健脚の方は大高森散策で松島湾を見渡せます） （医王寺薬師堂も見学できます）
移動	
16:00	JR仙台駅東口 到着・解散

見どころ・聞きどころ

○大規模な切土により高台移転を可能にした復興の取り組み
○特別名勝「松島」の景観に配慮したことは何か
○膨大ながれき処理の再資源化に向けた東松島方式とは
○新たなまちづくりに欠かせない鉄道の移設はどのように行われたのか
○新たにできた野蒜ケ丘のまちづくりの魅力は何か
○東日本大震災の津波の恐ろしさが残るプラットホーム

復興の魅力の全てをお見せします。

お勧めしたい方

○震災前の野蒜の魅力を知る中高年齢者
○復興過程の中で環境やSDGsに配慮した取り組みに興味がある若者
○震災伝承に関心の高い防災関係者、教育関係者

ご旅行実施日：来年1月18日㈬～20日㈮、25日㈬～27日㈮
2月1日㈬～3日㈮、8日㈬～10日㈮ 全12回
ご旅行代金：お一人さま大人1万円、子ども5000円（税込み）
最少催行人員：15名さま　**定員**：40名さま　**添乗員**：同行します
旅行企画・実施／
お申し込み・お問い合わせ：近畿日本ツーリスト株式会社仙台支店
3.11伝承ロードのウェブサイト内に開設される予約ページからお申し込みください
※お申し込みの際は詳しい国内募集型旅行条件書（全文）をお受け取りいただき、必ず事前に内容をご確認ください

表紙

被災地を歩く

7000キロの旅「奇跡の鳥居」

厳島神社（八戸市）

もうすぐ2022年が暮れる。今年も3月に福島県沖を震源とするマグニチュード7.4の地震が発生したり、8月には大雨特別警報が出された山形県で最上川が氾濫したりと災害が相次いだ。来年は東日本大震災から12年。年が明ければ、被災地では震災の犠牲者追悼行事に向けた動きが始まる。来年はどのような一年になるのだろうか。

八戸市の東南部、県道1号やJR大久喜駅の近くにある厳島神社は、昭和初期まで独立した島だったが、護岸整備により今は大久喜漁港と陸続きとなっている弁天島にある。小さな島には神社しかなく、ウミネコの繁殖地となっている。

東日本大震災の津波で厳島神社の鳥居は全3基が流された。このうち2基の上部の「笠木」という部分が、2年後に約7000キロ離れた米国オレゴン州の海岸で見つかった。笠木に書かれていた文字から厳島神社のものと判明。2015年秋に日本へ返され、その翌年、神社に再建された。以来「奇跡の鳥居」と呼ばれ、親しまれている。解説板もあり、津波流失から再建までの経緯や、鳥居をきっかけにした新たな交流などが記されている。

弁天島には小さな社と、鮮やかな赤の鳥居が並ぶ。元旦には地域住民らが、「今年は良い年でありますように」の願いを込め、太平洋を照らすご来光を拝みにやって来る。昇る朝日のはるか向こうには、鳥居が旅したオレゴンの海が広がる。



所在地
八戸市大字鮫町字大作平45

伝承ロード縁　2022年12月11日発行
発行／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構　編集・制作／株式会社クリエイティヴエーシー

記事を見ての感想、取り上げてほしい話題など、ご意見をお寄せください。　✉info@311densho.or.jp　FAX022-393-4271

無料